Café bohemia

Motoharu Sano Official Fan Association since 1986

http://mofa.moto.co.jp/ 2014 夏 Vol.134



「ヴィジターズ」30周年アニバーサリー

mofa

Café bohemia Vol.134

編 集 長: 大山貴
副編集長: 山田和弘
編　　集: 奥山千亜紀　小林史明　矢島一朗
編集協力: MFMP
デザイン: コヤママサシ
印　　刷: 高千穂印刷（株）
ファンクラブマネージメント: 有限会社カミングスター

監修: 佐野元春

Café bohemia Vol.134 July / 2014
発行: mofa　〒150-8691 東京都渋谷支店私書箱76号
編集: カフェボヘミア編集部　tel.03-5469-0922

http://mofa.moto.co.jp/

Café bohemia に掲載された記事を許可なく転載することを禁止いたします。
2014 © M´s Factory Music Publishers Inc. All rights reserved.

「ヴィジターズ」30周年、はじめて言葉を与えられるところに来た。

2014年6月24日　インタビュー・文／Cb編集部

フジロックで「ヴィジターズ」再現ライブを敢行。

―　1ヵ月後に迫ってきているフジロックフェスティバルについてお伺いします。バンドがザ・ホーボー・キング・バンド（HKB）とザ・ハートランド（HL）からのスペシャルバンドということですが、これはやはり「ヴィジターズ」の再現を考えてということでしょうか。

元春：「SOMEDAY」名盤ライブで披露しました、HLプラスHKBプラスアルファのスペシャルバンド、これは僕から見たらひとつの楽団です。今回においては「ヴィジターズ」というアルバム表現をライブで再現するわけですから、そうなってくるとバンド性が前に出ると言うよりは、僕がアレンジして僕が再現しやすい楽団を従えての演奏が大事ということ、再現性を前に出す。バンドのアイデンティティ、僕たちこういうバンドです、観てください、ではなくて、「ヴィジターズ」というアルバムの再現性を第一義に考えると、僕の楽団を率いて行くということです。

―　フジロックへの出演は佐野さんは初めてということで、聞くところによるとロックだけではなく民族音楽もあるなど、オーディエンスの年齢層が高めのようですが、そのあたりはいかがですか。

元春：僕、観衆はそこにいてくれれば何歳でもかまわないです。僕のアートを観てもらって感じていただくということであれば年齢は関係ないと思います。

ニューヨークでの生活から生まれた、自分のための音楽。

―　今日はリリース30周年を迎える「ヴィジターズ」についてじっくりお話を伺います。31年前、ニューヨーク（NY）で現地の音楽に触れて、これだ！という感覚はあったのでしょうか。

元春：NYに行く前までは、NYで録音するんだったらこういう曲調がいいかなぁという自分なりの予想があり、何曲か用意して行きましたけれども、現地で生活していくうちに、もっと個人的な曲を、もっと個人的な音楽を作るべきだ、みんなのための音楽じゃなくて自分のための音楽を作るべきだというように考えが変わってきました。

―　当時は、このアルバムを「一番痛みにあふれたアルバム」と語っていらっしゃいましたけれども。

元春：まあ、一年間いろいろなことがあったからね。その中で振り絞るように作ったという思い出もありますし。しかしもう30年も経てば、このアルバム「ヴィジターズ」、自分はかなり対象化できていますから、むしろあの時代にこのアルバムを制作できたことの幸運、喜び、そしてそこで出会ったエンジニアやミュージシャンたちのことを思うと、とても自分は幸運だったなという思いの方が先に立ちますね。

2014年秋、リリース30周年記念『VISITORS DELUXE EDITION』登場

現在ソニー・ミュージックは、『VISITORS』リリース 30 周年を記念して、
2004 年リリースの『VISITORS 20 周年アニバーサリー・エディション』を基盤にしながらも、
その後発見された未発表曲・映像・フォトのアーカイブを加えた”決定版=VISITORS DELUXE EDITION”を編集中。
2014 年秋に完全生産限定盤でリリース予定。



『VISITORS』について
1984 年春、ニューヨークからの帰国第1弾アルバムとして発表された『VISITORS』は、
戸惑いと称賛という両面を持って迎えられた。
『VISITORS』は、それ以前の佐野の音楽性とも、当時の日本の音楽シーンとも異質だった。
しかし一部の懸念をよそに、アルバムはアルバムチャート 1 位に躍り出る。
ソリッドなビートと啓示に満ちたポエトリー。それは革命だった。
佐野は、まさに時代の先駆者にして、次代の訪問者だった。

MWS『VISITORS（ヴィジターズ）』30周年サイトより

『コンプリケイション・シェイクダウン』

実は当初、冒頭にあるサウンド・エフェクトを入れていた。

―一曲ずつお話を訊かせていただきます。まず冒頭が『コンプリケイション・シェイクダウン』ですけれども、ラジオで確かリリース前にかけられていて…

元春：そうでしたね。

―初めて聴いたときにすごくカッコいいなと思いました。今の時代にボブ・ディランが『サブタレニアン・ホームシック・ブルース』をやるんだったらこんな感じじゃないかとお話されていたこともあったと思いますが、この曲のアイディアはどのあたりから来たのですか。

元春：『コンプリケイション・シェイクダウン』、この曲は最初は試作品だった。友人たちに聴いてもらうためのデモテープだね。当時僕の周りにいた友人たちは黒人、プエルトリカン、ヒスパニック系が多かったんです。みんな音楽が好きな連中であったので、そろそろヒップホップ、いいねっていうそういうときだった。まだ友だちが一人もいない中、僕が音楽を作って彼らに聴かせて友だちになる、それが友だちをつくる最速の手段でしたから、僕の得意なところの音楽を作った。彼らが夢中になっているヒップホップ、ラップの様式を使ってそこに僕の文化である日本語を練り込んで、試作品を作った。ただ、すべて日本語だとコミュニケーションがとりとめなくなってしまうので、フックの部分だけ英語を使って、彼らがあぁ、そういう曲ねとわかってくれるような形にした。フックのところ、「I'll keep walking on this complication shakedown」というように。それで、ヒップホップ様式プラス僕の中にあるジャズ風味を途中に仕込んで、彼らの言うストリート・ラップ、プラスもう少し音楽的なジャズ風味を加えた、僕らしい新しい何かとして彼らに聴いてもらった。そしたらすごく喜んでくれたんだね、完全なヒップホップだし、しかも日本語で唄う、何て唄っているかはわからないけれども、日本語によるラップは世界初だろうって言っていた。これはぜひ形にした方がいいという友だちのアドバイスがあり、そこからフィニッシュにもっていったということです。

―サックスも、それまでの佐野さんのメロディアスなサックスラインとは違って、アバンギャルドと言いますか、これは佐野さんのアイディアなのですか。

元春：そうです。「ヴィジターズ」を作るときにはとにかくミュージシャン、エンジニアに僕はこう言っていた、「アンユージュアル（unusual：普通でない、特異な）なものを作るんだ」と。だからサキソフォンのためにソロのパートを16小節開放するけれども、よくあるようなラインは吹かないでほしい、ストリートに唾を吐きかけるような何かを表現してくれ、そう言った。その結果そうなった。

―なるほど…。この曲の最後、パーカッションがずっと鳴り響きながらガラスの割れる音が2回、12インチだと4回くらい入っていますけれども、あれはどのような意味があったのでしょう。

元春：正確に言うとブレイキング・グラスの音が2回、12インチ・バージョンでは4回、そこにテレビのホワイトノイズがかぶさってくる、そういう終わり方でした。実を言うと冒頭にも僕はサウンド・エフェクトを入れていた。何かというと、NY、マンハッタン特有のアンビュランス（救急車）の音。けたたましいアンビュランスの、すごく緊急性を感じる、人の心を掻き立ててウォーニング（警告）するような音。僕は毎日毎日自分のアパートから聞いていた。これこそアルバム「ヴィジターズ」の冒頭にふさわしいサウンドだと思って、最終的にカッティングする日にそのNY・アンビュランスの音を持って行って、エンジニアに、「冒頭にこれを入れてくれ」と言って、それで入れた。そのあとから『コンプリケイション・シェイクダウン』が始まり、そして最後には路上に瓶を投げつけてそのグラスが壊れる音、それから窓辺から流れてくるアメリカ的なTVコマーシャルのホワイトノイズというところで終わって仕上げようと思っていた。

カッティングを終えてこれで終わったと思って、『コンプリケイション・シェイクダウン』の冒頭のNY・アンビュランス付きの音を何回も聴いていると、本当にこれでいいのかなって思い始めて。結論から言うと、翌日またスタジオに行って、そのNY・アンビュランスのサウンド・エフェクトをカットして音楽から始まってくれと指示して、それが作品となった。毎回けたたましいアンビュランスで始まって、聴き手としてはどうだろうかと思ったんです。そこまで緊急性を掻き立ててどうなんだろうって、あまりにも意図的すぎるんじゃないか、音楽アルバムなのだからやっぱり音楽で始まるべきだ。あまりにも明白な演出すぎると僕は判断したんです。ですのでその名残りが曲の最後に残っていると（笑）。でも曲の最後のサウンド・エフェクトについてはそれでいいなと思ったので残しました。

―この曲は12インチと7インチのシングルとして同時にリリースされているんですけれども、特に7インチはなぜリリースされたのですか。

元春：当時日本においてはまだ12インチという形態が広まっていなかった。多くのラジオ局はやはり7インチシングルを望んだ。僕はしかしクラブとかディスコがもっと街中で発展してきたならば、12インチの需要はあるだろうと見込んで、12インチシングル盤のレコードを作ってきましたけれども、僕が思っていたほど日本ではハプニングしなかったんですね。いずれにしても7インチシングルは必要でした、地方のラジオプロモーションのときに。



『トゥナイト』
当時、この曲はハートランド向きではなかったかな。

―次の曲『トゥナイト』が間髪入れずに始まります。この曲がファースト・シングルとしてカットされていますけれども、佐野さん自身、『コンプリケイション・シェイクダウン』をファースト・シングルにしたかったんじゃないかとも思うんですが。

元春：僕はどの曲をシングル・カットしてもらってもいいんです。ただ売る側は「これが売りやすいんだけれども」というのがありますから。『トゥナイト』に関して言えば、当時契約していたエピック・レコードが、たぶんこういう曲調だと安心するだろうと思ってこの『トゥナイト』を最初につくり、「NYではこんなレコーディングを進めていますよ」という、彼らを安心させる意図もあってまず彼らに聴いてもらった。

―佐野さんの本意ではなかった？

元春：彼らがどの曲を選ぶのかなっていうのは興味深かったけれどもね。『トゥナイト』を選んだのはやっぱりなと思いました。「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」の時でも、どの曲をシングル・カットしてもいいと思いましたけれども、レコード会社が選んだのは『約束の橋』でしたからね。僕の心の中では「もうちょっとほかにもあるんじゃないかな」と思いましたけれども、僕はレーベルとの関係において「絶対このシングルじゃないと嫌だ」とかそこまでフォース（強く主張）しない。僕は本当に民主的ですから、みなさんが思われている以上に（笑）。ただ振り返ってみれば、民主的すぎるのがいけないのかもしれないなと。アーティスト・エゴバリバリに出して生きてくりゃよかったかなと。でも世間では「佐野元春ってアーティスト・エゴバリバリだよね」って思われているのがなんだろうなと思うよ（笑）。僕ほどクリエイティブな作業において、民主的な態度を貫く人はいないと、自分では思っています。

―『トゥナイト』はヴィジターズ・ツアーではあまり演奏されていなかったようですけれども。

元春：HLの演奏があまりうまくいかなかった。この曲はドラム・マシンを使って、マシン・サウンドとヒューマン・サウンドのコンビネーションで作った。しかしHLには素晴らしいヒューマン・ドラマーがいます。古田たかし君ですね。僕は彼をそのマシン・サウンドにアダプト（順応）させるのはよくないなと思っていた。ライブでは「ヴィジターズ」以前の楽曲との調和ということもあって、『トゥナイト』という楽曲はあの当時はHL向きではないという判断が僕にはあった。

―当時のツアーでは「SOMEDAY」以前の曲も随分アレンジが変わっていましたね。

元春：全部変えました。全部「ヴィジターズ」寄りに16ビートのファンキーな編曲にしました。

―佐野さんの中で「ヴィジターズ・ツアー」とはどのような位置づけですか？

元春：随分長くやりましたね。そして全国すみずみまで演奏して回った。日本のロック・バンドが全国すみずみまで演奏して回れることを実現した最初のツアーではなかったのかなと思います。全国のプロモーターもとても頑張ってくれました。

『ワイルド・オン・ザ・ストリート』
セブンス・アベニューを「ジャングル・ピープル」が歩いていく。

―『トゥナイト』の次は『コンプリケイション・シェイクダウン』マナーのパーカッシブで佐野さんの楽曲では初のブラス・セクションをフューチャーした『ワイルド・オン・ザ・ストリート』が始まります。この曲にはどのような思いがありましたか？

元春：『ワイルド・オン・ザ・ストリート』は『コンプリケイション・シェイクダウン』とは実を言うと全く違う。『コンプリケイション・シェイクダウン』はシーケンス・サウンドですけれども『ワイルド・オン・ザ・ストリート』は素晴らしいドラマー、ウェザー・リポートのオマー・ハキムがドラムを叩いている。彼のドラムが中核となってできた。そしてサウンドで言えばファンク・ミュージックですね、ファンク・ミュージックにおいてブラス・セクションは必須の楽器ですから管楽器を入れたのは必然でした。そして何よりも工夫したのは日本語であるということと、その詩の内容です。

出だしは「冬のセブンス（7th）アベニュー」と唄っている。セブンス・アベニューは言ってみれば富裕層のアベニュー。別名ファッション・ストリートと呼ばれているとおり、世界一流のブランドの店が建ち並び、金持ちの白人たちがよく通るアベニューだ。そのセブンス・アベニューを大きなラジカセを持ったファンキーな黒人がけたたましい音を立てながら歩いていくという景色。それがまさに1984年のNYCだなと僕は思った。そしてフックのところはこう唄っている。「俺を壊してほしい／めちゃくちゃになるまで／I need love so bad」。普通のラブ・ソングだったら「I Love You」でとどめておくけれども、「I need love so bad」って、相当ねじれた愛し方って感じだよね。

ただ一つ問題があった。この曲では黒人の二人の女性のバッキング・ボーカルに、「ジャングル・ピープル」という言葉を唄ってもらった。彼女たちはこの「ジャングル・ピープル」という言葉は差別的な言葉だと難色を示した。そこで僕は彼女たちとよく話し合った。「この曲で言いたいことは、金持ちたちの価値観を変えること。プリミティブ（原始的）に生きる街路の人たちを、別名「ジャングル・ピープル」と言いかえてみた。だから決して差別的な言葉ではないんだ」と説明した。二人は理解してくれて、その後ゴキゲンなコーラスを入れてくれた。この一件は僕にとってとても勉強になった。

―そういったお話の一つ一つがこの曲を特徴づけていますね。

元春：そうだね。僕はおそらくみなさんが経験しないようなことをいっぱい経験してきた。

『サンデー・モーニング・ブルー』
NYをめぐる様々な思いをまとめた一曲。

―そしてA面の最後が『サンデー・モーニング・ブルー』。この曲はとてもメロディアスでほかの「ヴィジターズ」の曲とは質感が違うなと思っていたのですが、この曲をここに入れたというのはどんな思いからだったのでしょうか？

元春：『サンデー・モーニング・ブルー』こそ「ヴィジターズ」アルバムに入れなければいけない必然性のある曲だった。この曲の中にはいくつかの背景がある。要素として言えば、60年代のヴェルヴェット・アンダーグラウンド、J.D.サリンジャー、そしてジョン・レノンの死。この三つがある。タイトルは70年代ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの楽曲をリマインド（想起）するはずだし、詩の内容は、「The Catcher in the Rye（ライ麦畑でつかまえて）」で描かれたセントラル・パークの池のほとりでの景色を描いた。そして「世界はこのまま何も変わらない、君がいなければ」という表現は暗殺されたジョン・レノンの死に触れている。

そのころ住んでいたアパートメントからすぐそばにジョン・レノンが住んでいたダコタ・ハウスがあった。そこはジョン・レノンが暗殺されたもない（笑）。

元春：僕の作る楽曲に必然でないものは一曲





『ヴィジターズ』
84年のマンハッタンをネガティブに切り取ってスケッチした曲。

―ここでA面が終わり、B面の最初の曲、アルバム・タイトル・チューンの『ヴィジターズ』が始まります。この曲は「ヴィジターズ・ツアー」以外のツアーではあまり演奏されていないようですが。

元春： ツアーでやらないのはおそらくこの曲があまりにもNYだからでしょうね。どれくらい観客に通じるだろうかという心配があった。

―サウンドについてお話いただけますか。

元春： この『ヴィジターズ』は、ロックンロール、プラス、グレン・ミラーだね。NYといえばジャズの街。50年代にはビッグ・バンドが栄えた。『ヴィジターズ』のイントロを4ビート・ジャズで演奏したら、まるでグレン・ミラー楽団のようになる。紳士淑女がボール・ルームで踊っているかのようなメロディー。そこに歪んだギターを入れた。そこが新しかったと思う。NY、ジャズ、グレン・ミラー、そしてロックンロール。それが『ヴィジターズ』だ。

―また、リリックについてもお話いただけますか。

元春： アルバム「ヴィジターズ」は今風に言えば、「佐野元春のNY見聞ブログ1984」みたいな感じ。NYCという街をネガティブに切り取ったリリックが『ヴィジターズ』だ。一方、NYCという街をポジティブに切り取った曲は『カム・シャイニング』。二曲ともニューヨークの街をスケッチした。『ヴィジターズ』は光の部分から影を見ている。『カム・シャイニング』は影の部分から光を見ている。そういう対照的なリリックとなっている。

『シェイム―君を汚したのは誰』
僕のやり方で「怒り」をポップソングにするとどうなるか。

―そして次の曲がファースト・シングルのカップリング曲にもなった『シェイム―君を汚したのは誰』ですが、この曲にはどのような思いがありますか？

元春： とても個人的な悲しいストーリーがあって、そこから出てきたものです。ただ、自己憐憫にならないように気をつけて書いた。ひとが持っている「怒りと嘆き」をテーマにしてみました。

リリックの面で言えば、「偽り」「策略」「謀略」…と続く言葉。これは佐野元春の「ザ・ソングライターズ」ふうに言えばライミングです。どこでライミングしているかというと、言葉の頭にアクセントを置いている。「偽り」「策略」「謀略」…、いわゆる「頭韻」です。今はヒップホップの連中がごきげんなライミングをやっている。彼らはよく「脚韻」を使っています。語尾でライミングしていくんですね。でも「頭韻」は結構珍しいと思う。『アンジェリーナ』の「♪今晩誰かの車が来るまで闇にくるまっているだけ」、これもライミング。頭で韻を踏んでいる。

じゃあ、脚韻はというと、『ソー・ヤング』。ラインの最後を「ダイナマイト」、「タイト」「ナイト」というふうに韻を踏んだ。こうしたライミングは80年代では珍しかったと思うよ。

話の要点としては、僕はヒップホップ、ラップに触れる前から、既にこのように言葉とビートの関連について関心を持っていたということです。言葉の意味性よりも、ビートが前面に出た日本語のリリックを模索していた。あまり知的になりすぎず、かと言ってナンセンスではないリリックです。70年代では、「はっぴいえんど」ほか何人かの先進的なソングライターが、日本語をビートに乗せてやっていたけれども、僕の耳にはどれも知的すぎるか、言葉遊びに聴こえた。僕はその壁を越えたかった。

「ヴィジターズ」のリリックでも、言葉とビートの関連性について僕なりの実験を実践してみた。『シェイム』もそのうちの一つ。言葉が持つ「理知」と身体が持つ「ビート」のバランスをどこでとっていくか。それが探求のテーマとして常にある。言い換えれば、フォーク・ミュージックが持っている「理知」と、ロックンロール音楽が持っている身体性、そのバランスがとれた「フォーク・ロック」こそが、自分の音楽だと思っている。

―この曲のたたずまいは静かな感じなので、逆にすごく言葉の響きなどが伝わって来ます。

元春： 一つだけ心配だったのは、日本語のリリックが米国のバッキング・ミュージシャンたちにどう響くかということでした。『シェイム』はすごくナイーブな楽曲ですから、詩の内容を彼らに伝えないといけなかった。ミュージシャンたちがどういう気持ちで演奏したらいいか伝えるために、英語に翻訳して、どうにかうまくいきました。

サウンドで言えば、この曲はブロック・コードを多用している。ブロック・コードをよく使うのは、例えばホール&オーツやトッド・ラングレン。キーボードで曲を作る時は僕もよくこのブロック・コードを使う。

ただ、『シェイム―君を汚したのは誰』については実を言うと、サウンド面で満足していない。セッションミュージシャンのすばらしい演奏力を引き出さなかったと唯一後悔している楽曲だ。もっとほかにプロデュースの方法があったのではないか。ドラマーのオマー・ハキムほか優秀なミュージシャンたちのポテンシャルを最大に活かしきれなかったと、この『シェイム』については思っている。でもアルバムの中ではとても重要な一曲であることは間違いないです。

『カム・シャイニング』
ロック・アフリカンビート・カリブ・そしてオリエンタルのミクスチャー。

―　次の曲は『カム・シャイニング』。『ヴィジターズ』とは切り口が対照的な、影から見た光、ということですけども、プラスがフィーチャーされ、このアルバムをよく表現している曲かなと思います。

元春：　84年、僕はレコーディングしていない時にはよく街のクラブやライブハウスに行っていた。そこでは地元のバンドだけではなくアフリカやカリブ、中南米のミュージシャンがよく演奏していた。当時マンハッタンで活動していたバンドにトーキング・ヘッズがいた。トーキング・ヘッズは、トラディショナルな白人ロックンロールに、アフリカンビートや中南米のビートをミクスチャーして独特のサウンドを創っていた。僕の『カム・シャイニング』は、そうしたサウンドと共鳴している。

―　間奏のギターソロは、ギタリストがテレビの音に応えるように弾いた、と当時の本で読んだ記憶があります。

元春：　『コンプリケイション・シェイクダウン』と『カム・シャイニング』のノイズのようなギターは、今はもう死んでしまったマーク・フリーランドの演奏。街の小さなクラブで出会ったモヒカン頭のパンク・ロッカー、僕の親友だった。彼とはよく遊んでよく話をした。「N.Y.C. 1983~1984」という詩の中で、彼との出会いについての記述がある。彼は絵も上手で、よく僕の絵を描いていた。「エレクトリック・ガーデン」のブックレットの中に、眼鏡をかけて僕がピアノを弾いているイラストがある。あれは彼が僕の部屋で描いた絵だ。その彼は残念ながら亡くなってしまった。

ある日、僕がレコーディングに誘うと、彼は喜んでスタジオに来てくれた。彼は『コンプリケイション・シェイクダウン』でフリーキーなギターを弾きながら同時に、アメリカのクソッタレなテレビ・コマーシャルの音を録音した。『カム・シャイニング』でも同じアプローチでやった。『コンプリケイション・シェイクダウン』12インチ・バージョンの中で「Think about it」という台詞がある。これはあるTVコマーシャルの台詞だった。よくある常套句ではあるけれど、曲の中で聴くと「このクソッタレな状況を、よく考えた方がいいぜ」って意味に響いた。

TVコマーシャルをノイズとして使う。マーク・フリーランドのアイディアは僕の期待を超える素晴らしいアイディアだった。

『ニュー・エイジ』
憂鬱か甘美か一言では言えない複雑な未来に思いを馳せて作った曲。

―　ラストの曲は『ニュー・エイジ』。初めからこの曲をラストにと考えていたのですか。

元春：　レコーディングが終わった時点で、このアルバムのラストにふさわしいと思いました。

―　この曲の詩とメロディーについてお話いただけますか。

元春：　『ニュー・エイジ』はドラマーであるオマー・ハキムの叩き出すビートが中核となっている。そこにギターとベースがかぶさり、僕がピアノを弾いた。編曲においては84年のNYモダンを採用した楽曲と言えます。

1984年、僕はNYCに暮らしながら、何か変化の兆しを感じていた、あらゆるレベルで変化が起こっていると。社会学者は、その後に来る情報化社会について言及していた。地球はこれまでの産業社会から情報化社会になっていくと。僕も同じような予感を持っていた。僕はよく、ブルックリンの南端にあるコニーアイランドに行った。50年代に栄華を極めた遊園地があったんだけれども、既に廃れてしまってゴースト遊園地化していた。そこにボードウォークがあり、その先に広い海がある。僕はよくそのボードウォークの先に立って海と水平線を見ながら未来を感じていた。そして『ニュー・エイジ』という曲を書いた。不可解な未来に思いを馳せて作った曲。それは憂鬱なのか甘美なのか一言では言えない複雑な感情。情報に翻弄されて、個のゆくえがどうなっていくのかという不安があった。僕はその頃はまだ未来に憧れを抱いていた27歳だった。夜、暗闇に小舟を出して、同志と共に、今まさに大きな海原を未来に向かって漕ぎ出していくんだという、そんな思いを唄に込めた。ぼくらを乗せた小舟は遭難したのか、漂流しているのか。その答えは出さないままにしてある。だから毎回ライブで演奏できる。

―　フェイドアウトするちょっと前に仕掛けが入っていますよね。

元春：　仕掛けではない、これは表現だね。米国でレコーディングしたことの自分なりの楔（くさび）だ。「Oh Bungalow Bill, What did you kill, Bungalow Bill?」ヘイ、バンガロー・ビル、何を殺したんだい？という一節をバッキング・ボーカルの2人に唄ってもらった。バンガロー・ビルは、僕が思うに、ジョン・レノンが『The Continuing Story of Bungalow Bill』の中で示したアメリカの象徴だ。そのメッセージを『ニュー・エイジ』の最後に添えた。フェイドアウトのギリギリのところで入れたので気づかない人もいるかもしれない。これはまったく個人的な見解だけれど、米国で作った「ヴィジターズ」の最後を締めるには気の利いたアイディアだと思っている。

「ヴィジターズ」はどの音楽の文脈にも当てはまらない、ちょっと変わった存在であると思う。

ジョン・ボトカーの献身がなければこのアルバムはできなかった。

―　そのほか、アルバム制作にあたって思い出されることをお話いただけますか。

元春：　このアルバムを制作するにあたって貢献してくれたエンジニア・プロデューサーのジョン・ボトカー。彼の献身がなければこのアルバムはできなかった。彼は僕と同世代だった。僕らはNYで出会い、今までにないサウンドを作ろうと意気投合した。僕がミュージシャンやスタッフとコミュニケーションが上手くいかない時、彼は僕を助けてくれたし、僕が打ちひしがれている時に励ましてくれたのも彼。とにかく彼が友人として僕を常に正しいところに導いてくれたと思っている。だから振り返って思うことは、ジョン・ボトカーへの感謝。そして参加してくれたミュージシャンたちの理解だ。

当時は東アジアからミュージシャンが一人でやってきて、この街で欧米のミュージシャンたちとレコーディングするなんて例はほとんどなかった。どうやってコミュニケーションしたらいいかわからなかった。とにかくやらなきゃいけないことがたくさんあった。僕はプロジェクトのプロデューサーでもあったので、ミュージシャンとの契約も弁護士と向かい合ってやった。ミュージック・ビジネス全般、短期間でさまざまなことを学んだ。ミュージシャンたちは僕を信用してくれて、ユニオン（同業者の組合）を通さずに演奏してくれたので予算的に助かった。そこには映画になるくらいのいろいろなストーリーがあった。僕が言いたいのは彼らに感謝しているということだ。

『ヴィジターズ』以降、日本はバブル経済になって、海外レコーディングは当たり前のようになっていった。海外レコーディングする必要のないタレントも海外でレコーディングする、そんな時代になっていった。外には出せない話もたくさんある。でも、真実を語ることだけがいいとは思わない。真実は真実としてあり、歴史は見えないところで作られていく。

一つ確かなことは、『ヴィジターズ』が30年経った今でも、ファンのみなさんが心に留めてくれていること。それが僕には何よりもうれしい。『ヴィジターズ』が30年間サバイバルしてきたと解釈すれば、そのストーリーの10分の1でも話していいかなという気持ちになって話しました。残りはまたの機会に（笑）。

―　「ヴィジターズ」を初めて聴いた時、戸惑ったファンも多かったと思います。

元春：　「ヴィジターズ」というのはそれまでの佐野元春音楽の文脈にハマらないし、その後の国内のポピュラー音楽の文脈にも当てはまらない、ちょっと変わった存在だと思う。戸惑うのも仕方ないなと思う。

日本のポップ・ロックの様式はすべて欧米から来たものだ。欧米のポピュラー音楽をフォーマットにして、いかに日本的にカスタマイズしていくか。具体的に言えばそこにどう日本語をあてていくか、その工夫の歴史だった。特にビートに対する日本語のあて方、歌唱方法、そして楽曲のテーマ。これが課題としてあったと思う。僕は僕なりのやり方で工夫した。「SOMEDAY」や「ヴィジターズ」はその結果だ。

よく「ヴィジターズ」は日本語ラップの先駆けだとか言われるけれども、誰が最初だってかまわない。そこに新しい創造性があるかどうか、それが重要だ。

新しい何かが生まれてくる瞬間にはマグマが炸裂するかのような大きなエネルギーが生まれる。人々はそのエネルギーを何と言っていいかわからない。解釈できない。怖いとか、すごいといった印象はあるが、その「何か」について誰も言葉を与えることはできない。言葉を与えた先からそれは違うねという話になる。それこそが「真新しいこと」であることの証明なんだ。そして、それがなんだったのかということは、10年、20年と時が経ち、その表現と同質の表現があちこちに出てきて、比較することで、あー、これはこうだったんだね、とはじめて言葉を与えることができる。「ヴィジターズ」30年というのは、今そういうところに来ているんだと、そう思っている。

岩岡吾郎さんが撮ってくれたNYフォト、追悼も込めて写真集を作ろうと思っている。

―　「ヴィジターズ」デラックス盤のリリースがアナウンスされていますが、その点についてもお話いただけますか。

元春：　いつものように、ソニー・ミュージック・ダイレクトから佐野元春アーカイブ・シリーズの一環としてリリースされます。既に20周年アニバーサリー盤というものが出ていますから、それと内容が重複することのないように、今制作中です。実は今年、「ヴィジターズ」のマルチ・テープが発見されました。これは大事件なんです。マルチ・テープというのは僕たちがスタジオで録音した元のテープです。ドラム・ベース・ギター…、トラックごとに分かれて録音されているテープ、それが紛失してずっと探していた

30年目に見つけた「ヴィジターズ」のマルチ・テープ、うれしくて記念写真まで撮っちゃいました(笑)。

ところついに30年目に見つかりました。会いに行きましたよ。涙が出るくらいうれしくて、記念写真まで撮っちゃいましたから(笑)。30年目の対面。生き別れた子どもと会うようなものじゃないですかね、そりゃあ記念写真の一つも撮りたいと思うよね。おまけにそのマルチ・テープから未発表曲が一曲見つかった。デラックス盤にはその未発表曲を収録したいと思っています。

―　その他、「ヴィジターズ」に関連して何かお知らせはありますか。

元春：　NHK-BSが「ヴィジターズ」30周年にあたって、特集を組んでくれます。その番組で「ヴィジターズ」のレコーディング・エンジニアのジョン・ポトカーと30年ぶりに再会することになっています。これは本当に楽しみにしています。当時20代だった僕たちが30年ぶりに再会して「ヴィジターズ」のマルチ・テープをかけながら当時を振り返る…。ジョン・ポトカーとの再会が今のところ僕の中の一番の楽しみ。この放送は秋くらいになるんじゃないかな。もちろん詳細がわかればすぐにみなさんにお知らせします。

そして、「ヴィジターズ」というくくりの中でもう一人思い出す人がいる。それはフォトグラファーの岩岡吾郎さん。彼は残念ながら亡くなってしまったけれども、初期のルイード時代から僕のことをずっと撮り続けてくれた僕の友人でありフォトグラファー。「ヴィジターズ」の時もNYに来て撮ってくれた。それはのちに「エレクトリック・ガーデン」の小さな写真集として発表された。「エレクトリック・ガーデン」に掲載した写真に加えて、未発表のNYフォトをまとめて写真集を作ろうと思っている。それが岩岡吾郎氏の追悼になればいいなと思っている。

デラックス盤のパッケージには、新しいリマスタリング、12インチ、アウトテイク、そして7インチ・バージョンを収録します。「ヴィジターズ」の曲はだいたいダンス向けに作られているので、4、5分と長い。ラジオなどの放送で使うには長すぎますから、自分で編集したシングル向けのバージョンを作りました。それら全部収録します。すごくいいパッケージになると思う。「ヴィジターズ」の原盤権はソニーにあるので、僕は監修という形となりますけれども、ベストを尽くして、いいパッケージにしようと思っています。

―　リリースはいつになりそうでしょうか？

元春：　秋くらいになると思うよ。あと興味深いのは、「元春レイディオショー・イン・NY」。当時1年間、NYからラジオプログラムを送っていた。NHK-BSのスタッフが、今回の特集のために当時の放送を全部聴きなおして、すごく興味深いと言っていた。僕も聴いてみたいと思っています。当時ラジオで語っていることは、まさにその時、現在進行形で思ったり感じたりしていること。30年前、あの時自分がどう感じて何を言っていたか興味がある。それも調べて、いい形でまとまるようであればファンと共有しようと思っています。

―　初めはセントラル・パークのヤギにインタビューしたものですよね(笑)。楽しみにしています。本日はありがとうございました。



INFORMATION * 134

ファンクラバーの熱い思いをペンに、またキーボードに託して、編集部までお寄せください。

Cappuccino Talk Meeting

次回読者投稿コーナー　募集内容　　**締切り：2014年8月30日（土）必着**

このコーナーでは毎号募集するテーマに対し、ハガキ、封書などによる従来通りの投稿を受付するのに加え、インターネット上のmofaサイトのwebCbと連動して、サイトを通じて書き込んでいただくことも可能になりました。投稿方法に関わらず、本誌次号のコーナーに掲載されるチャンスが生まれます。皆さん奮ってご参加ください。

今回募集するテーマは、次の3点に関する感じたこと、思ったこと、考えたことです。

1．夏フェス（フジロックフェスティバル・Slow Music Slow Live '14 in 池上本門寺）に参加して
2．2014年秋ツアーへの期待
3．本誌134号の感想

http://mofa.moto.co.jp/pc/members/fangine/ctm/index.jsp

MAIL ORDER カフェボヘミア バックナンバー

MOTOHARU NEWS LETTER「カフェボヘミア」のバックナンバーは引き続きMAIL ORDERを受け付けています。売り切れの際は返金させていただきますので、あらかじめご了承ください。なお、現在購入可能なバックナンバーはVol.43、50〜56、58〜133です。他は売り切れですのでご了承ください。

◎1冊 ￥850
◎郵便振替でお申し込みください。
◎振替用紙に次の事項を記入して商品代金と送手数料の合計金額をご送金ください。
　口座番号：00180-3-16594　加入者名：モウファA
　通 信 欄 ：希望の号名、数、会員番号、電話番号
◎送手数料は、全国共通です。
　1冊￥350、2〜5冊￥500、6〜12冊￥650、13冊 以上￥1,250
◎お申し込み受付期間　2014年9月30日（火）まで当日消印有効

テレフォンインフォメーション

mofa（モウファ）では、元春の最新情報をお伝えする24時間テレフォンインフォメーションサービスをおこなっています。スタッフからのメッセージと最新の情報を随時流していますのでご利用ください。
tel：03−5469−0922（スタッフの対応は平日の月曜〜金曜15:00〜17:00）

ファンレター

元春宛のお手紙・プレゼントは、「佐野元春様」と明記してmofa宛にお送り下さい。スタッフが責任をもって元春に渡します。他の係宛とは別送お願いします。

編集部へのお便り

カフェボヘミア編集部ではみなさんからのお便りを随時お待ちしております。ご意見、ご感想、編集部への提案など、何でもお寄せ下さい。住所、お名前、会員番号を忘れずに。
e-mail：cb@mofa.moto.co.jp

事務局へのお問い合わせ

事務手続きなどでご不明な点などございましたら、mofa事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。メール・fax・電話・お手紙で受け付けております。
e-mail：member@mofa.moto.co.jp

全てのお便りの宛先

郵送：〒150-8691　東京都渋谷支店私書箱76号　mofa事務局内　各係
fax：03−5469−3179　※mofaオンラインサービスをご利用の方はe-mailをご利用下さい。
※件名に各係宛の明記と本文中に「会員番号」「お名前」をお忘れなくお願いします。

会員証再発行

会員証を紛失した場合は、実費＋送手数料で再発行します。郵便振替で会費口座へ500円を送金してください。
通信欄：会員番号、会員証再発行希望、電話番号をご記入ください。ご送金後、約1ヶ月で新しい会員証をお届けします。※ 会員証再発行は郵便振替のみでの受付です。

クラブ継続

「mofa」オンラインサービスへアップデートされることによりオンラインによる手続きが可能です。アップデート手続きは、無料です。まだの方は、ぜひ、「mofaサイト」をご利用ください。

◎アップデート手続きはこちらから ― http://mofa.moto.co.jp/
オンラインによるカード決済、コンビニエンスストアをご利用頂けます。従来の郵便振替による受付も今まで通り可能です。

期限切れ後3ヶ月間は継続手続きが可能ですが、その場合期限月にさかのぼっての処理ではなく入金された月からの一年間の継続となり会費未納期に出された会報、DM等は一切お送りできません。4ヶ月以上未納の場合は再入会となります。会費は期限の切れる月の20日までにmofaオンラインサービス又は郵便振替にてご送金下さい。期限切れはトラブルの原因になりやすいので充分気をつけてください。

※ 会員期限証（受領証）は振込受領証またはカード引き落とし明細でご確認頂ける為、発行は致しませんのでご了承下さい。
※ 会員期限は、mofaサイト・発送物宛名シールにてご確認いただけます。宛名シールの出力準備の都合上、末日に継続手続きされた方は旧期限のデータで表示されますが、手続きに不備などなければ完了しております。

郵便振替口座番号：00190-1-106838
加入者名：モウファ
送金金額：1年￥5,000
通 信 欄：継続希望と会員番号、電話番号
※ 旧用紙でもご送金頂けますが金額にご注意下さい。

住所変更

住所、氏名が変更になる場合は、速やかに「mofa住所、氏名変更」係まで、おハガキでご通知下さい。mofaオンラインサービスをご利用の方は、フロントデスクのMOTO TVの下にあります、「メンバーシップ情報」よりご自身で登録データの変更が可能です。尚、発送物の関係上、必ず郵便局に転送届を出すのもお忘れなく。他の係宛のものに同封されますと手続きが遅れる場合がありますので、必ず別送してください。

編集後記

今回のインタビューでは佐野さんに「ヴィジターズ」の各曲について詳細に語っていただきました。まだまだお聞きしたいことはたくさんあったのですが、佐野さんの楽曲が一曲一曲かけ算に作られているかがわかる内容になっていると思います。ファンの皆さんが「ヴィジターズ」に限らず、佐野さんの音楽からまた新たな発見をすることができたら幸いです。デラックス・エディションも楽しみですね。（小林史明）

今号は「ヴィジターズ」特集。高校生の時、初めて街のレコード屋で予約して買ったのが「ヴィジターズ」でした。最も好きで数えきれないくらい聴きこんだこのアルバムについて、30年後にここまで深い話がきけるとはただただ感激の一言です。（矢島一朗）

思い起こせば、会報がこの新体制になって1冊目の第103号にて、「ヴィジターズ」20周年アニバーサリー・エディションについて語っていただきました。その際は関連する映像作品についてのお話が多く、今回は収録曲とレコーディングについてのエピソードが中心でした。リリースから30年というよりも、20周年から10年の早さに驚くばかりです。（山田和弘）

写真／岩岡吾郎

佐野元春 and The Hobo King Band Billboard Live 'Smoke & Blue 2014'

Band Member　古田たかし（Drums）、井上富雄（Bass）、Dr.kyOn（Keyboards）、笠原あやの（Cello）

【セットリスト】

1st Show

4月18日（金）・19日（土）/ 大阪
4月27日（日）・28日（月）/ 東京
5月 8日（木）・ 9日（金）/ 大阪
5月13日（火）・14日（水）/ 東京
6月13日（金）・14日（土）/ 大阪
6月27日（金）・28日（土）/ 東京

1.ヤァ！ソウルボーイ
2.IT'S ALRIGHT
3.君が気高い孤独なら
4.月と専制君主
5.希望
6.君がいなければ
7.また明日. . .
8.レイナ
9.C'mon
10.君と往く道
11.荒地の何処かで
12.食事とベッド
13.約束の橋
14.ドクター
15.夜のスウィンガー
16.ドライブ

2nd Show

4月18日（金）・19日（土）/ 大阪
4月27日（日）・28日（月）/ 東京
5月 8日（木）・ 9日（金）/ 大阪
5月13日（火）・14日（水）/ 東京
6月13日（金）・14日（土）/ 大阪
6月27日（金）・28日（土）/ 東京

1.ヤァ！ソウルボーイ
2.IT'S ALRIGHT
3.君が気高い孤独なら
4.月と専制君主
5.希望
6.月夜を往け
7.恋する男
8.レイナ
9.C'mon
10.すべてうまくはいかなくても
11.レインボー・イン・マイ・ソウル
12.食事とベッド
13.約束の橋
14.ドクター
15.夜のスウィンガー
16.ドライブ

5月9日（金）/ 大阪

1.ヤァ！ソウルボーイ
2.IT'S ALRIGHT
3.君が気高い孤独なら
4.月と専制君主
5.希望
6.月夜を往け
7.恋する男
8.レイナ
9.C'mon
10.すべてうまくはいかなくても
11.レインボー・イン・マイ・ソウル
12.食事とベッド
13.君と往く道
14.約束の橋
15.ドクター
16.夜のスウィンガー
17.ドライブ

5月14日（水）/ 東京
6月14日（土）/ 大阪

1.ヤァ！ソウルボーイ
2.IT'S ALRIGHT
3.君が気高い孤独なら
4.月と専制君主
5.希望
6.月夜を往け
7.恋する男
8.レイナ
9.C'mon
10.君と往く道
11.すべてうまくはいかなくても
12.レインボー・イン・マイ・ソウル
13.食事とベッド
14.約束の橋
15.ドクター
16.夜のスウィンガー
17.ドライブ

6月28日（土）/ 東京

1.ヤァ！ソウルボーイ
2.IT'S ALRIGHT
3.君が気高い孤独なら
4.月と専制君主
5.希望
6.月夜を往け
7.君がいなければ
8.恋する男
9.レイナ
10.C'mon
11.君と往く道
12.すべてうまくはいかなくても
13.レインボー・イン・マイ・ソウル
14.荒地の何処かで
15.食事とベッド
16.約束の橋
17.ドクター
18.夜のスウィンガー
19.ドライブ

Cappuccino Talk Meeting

ファンクラバーと編集部の交流の場である読者投稿コーナー

スモーク・アンド・ブルー　2014に参加して

4月と6月にビルボードライブ大阪公演に参加しました♪元春&HKBの、時にはブルージーに、時にはR&Bに〜振り幅のある演奏に仲間と感動、歓喜のひとときを過ごしました♪曲の1つ1つに自分の歴史も詰まっていて、元春と一緒に歌い、ビートを刻みながら〜どんな時も共に在ってくれた音楽に感謝しました。ありがとう元春！また 毎日を頑張る力をもらったよ♪（WILDネコ）

編：2年前に続き、今回の公演も素晴らしかったですね。将来的なシリーズ化も考えられているようで、定例ライブ化されることを期待しましょう。

「SWITCHインタビュー達人達」浦沢直樹さんとの対談を観て

SWITCHインタビュー達人達、見ました。お互い「昔なりたかったもの」同士の対談、面白かったです。浦沢さんの突然ひらめいて描いたエピソード（ビリー・バット）の話が印象的でした。元春にも、そんな感じで出来た曲があるのかな？ちなみにワタシは「20世紀少年」が好きです。（小林麻央）

編：スピンオフ番組「僕らの"ボブ・ディラン"を探して」も含めて、2人の才能と芸術に対する愛が感じられる、素敵な番組でしたね。

